

シンポジウム「教える集団をどう組織するか」

司会 大塚 雄 作 (京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

溝 上 慎 一 (京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)

(溝上) それでは、司会を交代いたしまして、シンポジウム「教える集団をどう組織するか」を始めます。17時までを予定しておりますので、よろしくお願いします。

まず、シンポジウムの趣旨をご紹介する前に、お招きしている報告者の4人の先生をご紹介します。愛媛大学学長の柳澤康信先生です。本日はどうぞよろしくお願いいたします。続きまして、流通科学大学商学部教授、教育高度化推薦センター長の南木陸彦先生です。よろしくお願いいたします。続きまして、三重大学教育学部教授、学部長補佐(教育改革担当)の根津知佳子先生です。よろしくお願いいたします。最後に、文部科学省の高等教育局高等教育企画課長の義本博司さまです。よろしくお願いいたします。

少しスタートが遅れましたので趣旨の説明を短くしますが、先ほどから松下の説明にもありますように、私たちは相互研修型FDという一つ大きな理念を掲げて、世の中にFDモデルとして推奨してきています。毎年行われているこの大学教育研究フォーラムでも、これに関する、特にFDの組織化をテーマにシンポジウムを行ってきました。先ほどから定義が出ているように、相互研修型FDとはローカルな文脈、大学や学問などの固有の文脈を外さず、教員の自発的、自生的な相互研修を目指すFDの形態です。それに対するのは、ご存じのトップダウンの取り組みです。私たちは相互研修型FDを中心に提唱していきながら、他方でトップダウンの取り組み、あるいはその力学をどのように位置付けていくかということを検討してきました。

この二つのFDの形態は、ぶつかり合うものではありません。私たち京都大学も相互研修型FDをもとにやっていますが、他方で、全学のFD委員会、あるいは地域活動で言えば関西地区FD連絡協議会など、いわゆるトップダウンに相当するような組織づくりを進めてきています。先ほどの文学部のプレFDなどは、センターと協働しながら、他方では全学のFD委員会が支援する形で、文学部の文脈を保持しながら進められているものです。このようなものは、全学のトップダウンということではありませんが、全学の取り組みの中にも位置付けられつつ、ボトムのローカルな文脈は捨象しないという取り組みになっています。関西地区FD連絡協議会でも、いろいろなプログラムがあるので、当てはめ方の研修プログラムもありますが、できるだけ参加者の同僚性というか、相互研修になるようなプログラムの作り方を考えてきています。そのように、相互研修型FDを理念として推奨しながらも、どのように全学、あるいはトップダウンの組織づくり、FDの組織化を図っていけるかということをこれまで検討・実践してきたわけです。

本日もこういう流れで、特に今回は学長の柳澤先生から、ポジション的には偉い方が多いのですが、取り組みとしてはミクロからミドル、マクロとさまざまなものが報告されると思います。そうしたさまざまな水準におけるFDの取り組みを基に、その事例をまず拝聴しつつ、他方で全学的に取り組んでいく中で相互研修型FDやローカルな文脈を捨象しない全学的なFDの推進がどのように図られるかということを考えていきたいと考えています。

私たち企画の方で考えている各報告者への期待を簡単に述べて、早速、報告に移っていききたいと思います。柳澤先生は大学の長でありますので、組織のトップの立場から、各学部、あるいは教員、教職員の研修を考えておられます。このようなトップのお立場から見られた中でも、資料を拝見しておりますとActorという言葉が使われていますが、各水準の担当者にその文脈を保持するような活動を期待していく、促していくという形で、ローカルな文脈を捨象しないけれども、全学としては形を作っていくFDの推進が可能なのだというお話をいただけるものと期待しております。これが柳澤先生に私たちが期待しているものです。

続きまして、南木先生には、皆さんご存じのように、流通科学大学はオープンクラスウィークでしょうか、OCWと呼ぶとちょっと違うものをイメージしますが、全教員に授業公開を実施して、授業検討会まではされていないのでしょうか、その辺も詳しくご報告いただけたらと思いますが、とにかく全教員に授業公開を実施するという形態自体が

相互研修型 FD につながる取り組みであると私たちは理解しています。そうした取り組みも、今年、特色 GP にも採択されて推進されているようですが、この3月が最終年度ということで、これまでの成果をまとめていただき、来年度につなげていくお話が聞けるのではないかと思います。そういう形で南木先生にはお願いしています。

続きまして、根津先生の三重大大学の取り組みは非常に多彩で、午前中の個人研究発表でも三重大大学の発表が重なりました。私たちは一大学の部会になってしまっただけで参加者が来られないのではないかと心配もしましたが、いろいろ教室を眺めていると、三重大大学を中心とした個人研究発表の場が一番あふれるような形になっていまして、三重大大学に対する全国の関心の高さを強く実感しました。根津先生の教育学部、あるいは高等教育創造開発センターでは非常にいろいろな取り組みをボトムアップでされていて、教員の自発的なプロジェクト FD 活動というのでしょうか、教員が自発的にいろいろなプロジェクトを組んだりして FD を進めていくということを組織的に推進しています。それだけではありませんが、そのようにさまざまに組織的に取り組みつつも、教員の自発的な、あるいはローカルな文脈を保持した活動に取り組まれているということで、そういうお話を聞けるものと期待しております。どうぞよろしくお願いいたします。

最後に、義本さまには、もう言わずもがなですが、文部科学省のお立場で、今、全国の大学で FD にどのように取り組まれているのかという鳥瞰図的なもの、当然、課題もたくさんありますので、文部科学省で感じておられる課題、それから、南川理事補からも話が出ましたが、今、教育関係共同利用拠点としての申請を私たち京都大学もしておりまして、地域のネットワークや FD コミュニティを作っていく組織的な取り組みを進めています。そうした取り組みをはじめ、文部科学省で現況課題になっている FD の問題などを少し含めつつ、お話をいただきたいと期待しております。

司会は前半は私、溝上が務めまして、4人の先生方が報告を終えられてから、休憩後は田中に交代します。そのような感じで5時まで進めたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは早速、柳澤先生のご報告に移りたいと思います。